

ごみゼロ部会

Zero waste

主な活動内容

ごみゼロ部会では、リユース食器の導入や水飲み・給水インフラ導入の推進、食品ロスの削減などを活動の柱に取り組んでいます。これらをレガシーとして社会へ定着させることが目標です。



(写真提供: NPO地域環境デザイン研究所 ecotone)

サステナブルな社会づくりへのメッセージ

東京2020大会を契機に、“脱使い捨て”の取り組みを定着させ、循環型社会の構築を！

東京2020大会に向けた問題意識と目指すもの

大規模なイベントの開催により、短期間に膨大な量の廃棄物が排出されています。東京2020大会では、大量生産・大量消費・大量廃棄ではなく、3R(リデュース・リユース・リサイクル)の優先順位に沿った様々な方法を用いて、ごみゼロを目指した大会運営がなされるべきだと考えます。

ごみゼロ部会では、リユース食器の導入や水飲み・給水インフラ導入の推進、食品ロス削減などに向けた提言・実践活動を行うことにより、スポーツ大会、

スポーツ施設のほか、お祭り会場など様々な施設やイベントにおいて、リユース食器が日本の文化として定着することを目指しています。

また、水飲み場をはじめ、水筒への給水可能なインフラ設備をスポーツ施設や街なかに増やし、人々の行動変化とともにレガシーとすること、そして、食品ロス削減に向けた取り組みが浸透することを目指します。

サステナブルな未来に向けた提言や実践

提言
1

使い捨て容器に替わるリユース食器（リユースカップ）を導入

多くの選手や関係者、観客が集まるスポーツイベント会場では、飲食提供時に短時間で大量の使い捨て容器が消費され、ごみとして処理されます。マラソン大会等では、給水時に使用される大量の使い捨てカップがコースに散乱する光景も目にします。使い捨て容器に替えて、洗って繰り返し使えるどんぶりやお皿、カップ、カトラリーなどの「リユース食器」を導入することで、資源の有効活用や温室効果ガスの削減など、環境負荷の低減につなげることができます。また、リユース食器の洗浄や保管は社会福祉施設が担う場合もあるため、環境と福祉をつなぐ取り組みであり、震災など災害発生時の非常用食器としても活用されています。

こんな方法で実践しています！

1. 回収方式

スポーツイベント会場で飲食販売時にリユース食器を導入し、使用済みのリユース食器を回収ステーション(その他ごみなども分別回収する場所)や売店などで回収、洗浄施設で洗浄後に、再びイベント会場で使用する仕組みです。主催者、売店、観客、すべてのステークホルダーが仕組みを理解し、協力を得られるようにコミュニケーションを図り、広報を徹底することが重要です。また、デポジット(預り金)をかけたリクーポンを配布するなど、回収率を高める仕掛けも有効です。日本では、2000年頃からお祭りなどのイベント会場でリユース食器の利用が始まり、日本三大祭りの祇園祭(京都市)では2014年から、天神祭(大阪市)では2017年から導入しており、ごみの削減や散乱の防止に大きな効果をあげています。



祇園祭(京都市)におけるリユース食器使用の光景
(写真提供: 地球・人間環境フォーラム)

2. 持ち帰り推奨方式



大規模なスポーツイベントでは、試合開始前やハーフタイムなどの短い時間に観客が飲食の売店に集中して混雑するため、リユース食器を使った販売・回収が難しい場合があります。こうした状況下でも使い捨て容器を削減する方法として、オリジナルデザインのリユース食器を導入し、持ち帰りを推奨する仕組みがあります(不要な場合は返却してもらい食器代を返金)。2018年11月3日に、味の素スタジアム(東京都)で開催されたラグビー日本代表対ニュージーランド代表の試合で、リユースカップの実証実験を行いました。4万3,571人が来場するなか、リユースカップの販売数が9,885個、返却数が939個と、90.5%が持ち帰る結果に。利用者には非常に好評で、同じカップで何杯もおかわりする光景もあり、おかわり分の使い捨てカップ削減にもつながりました。

(天野路子/地球・人間環境フォーラム)

2018年ラグビー日本代表対ニュージーランド代表の試合で導入したリユースカップ
(写真提供:地球・人間環境フォーラム)

2. 仮設給水ステーションの設置

大勢の出場者、来場者が見込まれるスポーツイベントにおいては、施設に設置された冷水機だけでは足りません。そのため、会場の内外に仮設の給水ステーションを設置しましょう。仮設の給水ステーションは、大会の規模や設置場所に応じて水道直結式、または貯水タンク式が考えられます。

A 卓上型貯水タンク式給水機

テーブル上に設置する小型の貯水タンク式給水機に水道水を入れて提供する方法は、手軽に導入できます。ただし基本的に容器が必要となるため、水筒の持参を徹底するか、リユースカップなどの導入を合わせて検討する必要があります。また、イベントの規模や利用者数によっては、頻りにタンクに水を補充するための人員が必要になります。なお、宅配水の利用は輸送エネルギーや容器が使い捨てである点で、ペットボトルと大きく変わらないため推奨しません。

奈良県生駒市は、自治会の運動会などのイベントに卓上給水機を貸出し(写真提供:生駒市)



B 水道直結式給水ステーション

会場内の水道の蛇口につなげて設置する直結式は、新鮮な水を補充の手間なく大人数に供給することができるため、大規模なイベントにも対応可能です。ボトル給水用だけでなく直飲み用も設置できるため、容器不要で誰もが利用できる利点も。ロンドン、リオデジャネイロオリンピックの一部の会場でも導入されています。



天神祭(大阪市)会場に設置されたRefill Japanの給水ステーション(写真提供:水Do!ネットワーク)

C 給水車

自治体が主催または関係するイベントにおいては、水道局所有の給水車や給水タンクを利用することも考えられます。上記⑧の水道直結式給水ステーションと組み合わせることで、水道管の有無による設置場所の制約なしに、快適な給水環境を提供することが可能になります。

上記④および⑧は、大会主催者が所有することも可能ですが、もしイベント用に貸出しを行っている機関があれば、そこからレンタルすることで経費面も効率化することができます。冷却可能な機器を選択することにより、冷水を提供することも可能です。

(瀬口亮子/水Do!ネットワーク)

提言
2

給水インフラの導入でペットボトルに頼らない水分補給対策を

特に夏のイベントでは、炎天下での活動や長時間行列に並ぶことで、熱中症患者が発生するリスクが高く、主催者はその対策として出場者、来場者、スタッフに適切な水分補給の環境を整える必要があります。その際に、ペットボトルなどの使い捨て容器に入った飲料の販売や配布ではなく、水道水による給水インフラの整備を優先することで、ごみ減量、温室効果ガス削減といった環境負荷低減だけでなく、人々の命や健康を守ることの両立につながります。

場所や規模に応じた設備を /

1. 会場・スタジアムおよび 周辺への給水インフラ設置

冷水機(直飲み用、ボトル給水用)の設置は、本来スポーツ施設には必須と考えられます。設置されていない場合は、大会の開催を契機に設置することで、大会後もレガシーとして継続的に利用されることとなります。

都内のスポーツ施設に設置された冷水機(ボトル給水対応)
(写真提供:水Do!ネットワーク)





(写真提供: NPO iPledge)

提言
3

大規模スポーツイベントにおいて、 ごみ資源分別ナビゲート活動を実施

大規模イベントでは、会場内で一時的に様々な種類のごみが大量に排出される一方で、分別回収が進まずリサイクルが課題となっています。多くの競技場では分別用のごみ箱が設置されていますが、地域により分別内容が異なる、わかりやすい表示の不足といった理由から、観客に適切な分別内容が伝わらず、

ごみと資源が混ざってしまう、ごみ箱ではない場所にごみが置き去りにされてしまうなどの現状があります。ボランティアによるごみの分別ナビゲート活動は、他府県のみならず世界中から来場する観客にも適切な分別を促すことができ、競技場をクリーンに保ちながらリサイクルを促進できます。ごみ資源分別ナビゲート活動は、FUJI ROCK FESTIVALなどの野外音楽フェスティバルを中心に、全国各地の野外イベントや海水浴場でも導入されています。特に、フェスティバル会場では大量のごみが発生しますが、ボランティアの活動により来場者の共感・協力を得ながら適切な分別が進みます。会場内で回収した資源を翌年分のごみ袋やトイレトーパーにリサイクルするなど、会場内での資源循環が進んでいる好事例も多くあります。



(写真提供: NPO iPledge)

楽しみながら活動することでポジティブな連鎖が

1. ごみ資源分別ナビゲート活動とは？

ごみ箱の後ろにボランティアが立ち、ごみを捨てにきた観客とコミュニケーションをとることで、適切にごみ資源の分別を促す活動です。ボランティアが観客の代わりに分別を行うのではなく、捨てにきた人自身が自分の手で分別できるように促すことで、来場者自身のマナーアップにもつながります。



(写真提供: NPO iPledge)



(写真提供: 地球・人間環境フォーラム)

2. ボランティアが活動する意味

ボランティアが楽しみながら活動する、また観客とコミュニケーションをとることは、単に適切な分別につながるだけでなく、観客自身のなかにポジティブな意識と行動を生みます。その結果、会場全体がクリーンでピースフルな空間となることにもつながります。

3. 来場者参加型の環境対策

観客自身が自分の手でごみの分別を行うことで、参加型の環境対策、ひいては参加型のスポーツイベントをつくりあげることができます。さらにはこの体験が、観客が日常に戻った後も、一人ひとりが分別や環境問題に目を向けるきっかけになります。

(羽仁カンタ、山口記世 / NPO iPledge〈アイプレッジ〉)



(写真提供: NPO iPledge)